HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	S.パールマンのロシア革命・農民運動論
Author(s)	日南田, 静真
Citation	北海道大學　經濟學研究, 27(1), 233-250
Issue Date	1977-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/31374
Type	bulletin (article)
File Information	27(1)_P233-250.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

S. パールマンのロシア革命・農民運動論

日南田　静　真

セリッグ・パールマン（Selig Perlman）は，1888年，西部ロシア・グロドノ県（現ポーランド人民共和国）のビヤウィストク（Białystok）[1]に生まれ，1959年にアメリカのウィスコンシン州で亡くなった。1905年革命の深刻な体験を経て若くしてアメリカに移住した彼は，ジョン・R．コモンズ（John R. Commons）の最愛の弟子かつ協力者となり[2]，コモンズ・グループの共著 *History of Labor in the United States*, 4 vols, N. Y., 1918—35. を完成し，自著 *A Theory of the Labor Movement*, N. Y., 1-st ed. 1928, 2-nd ed. 1949. その他を以ってアメリカ労働運動史家として名を成した[3]。彼はすでにこの *A Theory* において，第1篇　歴史，第2篇　労働運動の理論の2篇構成のなかの第2章として「ロシア革命」についてのすぐれた叙述を与えていたが，このたび，われわれは，彼の高弟の一人 A. L. リーシュ・オウエン（A. L. Riesch Owen）女史の編集になる *Selig Perlman's Lectures on Capitalism and Socialism*, Madison, 1976.（以下 *Lectures* または『講義』と略称）を手にすることができた。

フィリップ・タフト（Philip Taft）は，パールマンの教育者としての実力について次のように書いている。「パールマンは，ウィスコンシン大学の指導力ある教師の一人だった。多彩な言い回し，ウィット，そして鋭い当意即妙な表現の数々は，学生たちに大きな知的経験を与えた。彼の影響は，数十年にわたって学生たちに，一般原理に関心を集中するのでなく現存の諸制度や諸グループの態度と行動を調査するように導びき，そのことによって多くの学生が政府や産業界でいっそう効果的に仕事をすることができるようにさせた。パールマンは，引込思案な（shy）人で，大きな集会にはうちとけず，学界の会合にもほとんど姿を見せなかった。彼が自分の業績の発表に慎重で

あったり，論争や議論を避けたり，一度表現した見解に頑固にこだわったために，少くともウィスコンシン大学の外部では，彼の評価はやや低い。しかしパールマンは，なんといっても労働運動研究における指導者の一人であったし，彼の教育および著作の活動はこの分野で不滅の足跡を遺しているのである」と[4]。このような教師の講義録が忠実に再現されたこと自体が興味あることであるが，特異な経歴をもつパールマンのロシア革命論とくにその農民運動論の内容もまた，きわめて注目に値する。

本稿は，この新著にあらわれたところのいわば「体験的ロシア革命・農民運動論」を紹介し，批判は差控えて若干の注のみを付するものである。

リーシュ・オウエンの編集したこんどの講義ノートは，パールマンのウィスコンシン大学における「資本主義と社会主義」なる題目（学生たちが"Cap-Soc"とよんでいた評判のものであった）による1942年の講義に基づいており，次のような構成である[5]。

〔1〕マルクスの理論〔各部の小節は〔1〕では省略〕

第一部　知の確実性

第二部　マルクスの歴史理論

第三部　マルクス国家・社会理論の政治学

第四部　帝国主義と戦争

第五部　マルクス批判

〔2〕ロシアの経験

第六部　発達

○　資本主義の変化およびロシアのユニークさと型

○　ロシア革命の背景：ロシア国家

○　ロシアの都市，工業，企業者階級，宗教の変化

○　なぜロシアに革命が？

○　ロシア農民

○　ロシア労働者階級

第七部　革命の展望

○　ロシア革命における知識人（インテレクチュアル）の役割

○　知識人の構成，イデオロギー，ナロードニキの思想

第八部　諸党派

○　マルクス主義者とナロードニキ

○　マルクス主義者たちと分派

○　右と左の闘争

第九部　共産党

○　ネップ，レーニンの死，党内闘争

○　スターリンの綱領

第十部　価　値

○　マルクスの経済均衡論

○　価　値

これに，ディスカッションの部と四つの付録およびビブリオグラフィーと索引がついており，全体を183ページにまとめているものである。

今日でこそアメリカでもまた日本でも，主題についての研究はいちじるしく進んでいるように見えるが[6]，内容をみれば，パールマンが1942年の時点でかなりすぐれた正確な叙述と判断をしていることがわかり，驚かされる。しかも，これが尨大な文献資料の研究に基づくとともに，自己の生活・革命体験に基づくというところにユニークさがある。

さっそく，第六部のうちの「ロシア農民」の部分の紹介に入ろう。われわれは，タフトのいう「ウィットや当意即妙な表現」にふれるためにも，拙訳で全文をかかげる。なお〔　〕は私のもの。（*Lectures*, pp. 75—79）

……ロシアの農民は，土地所有者階級としては西洋や他のヨーロッパの国々の農民とは違っていた。旧ロシアでは土地所有形態は集団的所有であり，村落が集団的統一体であった。〔革命後の〕今日ではロシアはもっと集団的でさえある。旧ロシアでは土地の周期的割替えがおこなわれ，集団主義が協定農耕の型にみられた。農民はお互いいっせいに作業をした。農作業がいっせいに行なわれなければならなかったのはあらゆる農家が或る権利や要求を同

じように持っていたからである。収穫後むら全体が家畜を耕地に放牧した。誰ひとりとして,「おいらはみんなとは違ったやり方で農業をやるべえ」とは言えなかった。農民生活における集団主義は，まずは，土地の所有と処分の点にあり，ついで，各農家が個別単位として作業をする時にも他の農家と協力して行なうという点にあった。このことは農作業のやり方が守旧的であることを意味する。三年に一回，土地は休閑に付された。こうして彼らは輪栽式の新農法に移ってゆくことができなかった。

以上のように諸君は，旧ロシア農村の集団主義の二つの面を理解した――すなわち土地所有および農家間協定，である。

今日のロシアでは農民生活は革命前より以上にはるかに集団化している。それは生産が集団化されたからである。ロシアは，農民が個別企業者ではなくまさに集団の被傭人であって投下労働時間にもとづいて報酬を受取るような，一つの経済である。

1917年のロシアでは，集団的特徴が強く私有財産は弱かった。農具，役畜などは大したものではなかった。土地が重要だった。土地が最大の所有対象であって，それが集団主義者〔collectivists〕によって所有されたとすれば，一般に私有財産なるものに賛成することにはならなかっただろう。これが，農民が私有財産を尊重せず物を盗ることに罪を感じなかった理由である。この農民たちは，私的所有の学校を通過したことのない階級である。

ドイツに対するロシアの抵抗〔1941．12～'43．1で特に顕著〕があれほどに成功したのも，またロシア人が〔防衛的〕焦土作戦をもちいたのも，彼らがいまだかつて私有財産を持たなかったからである。物みな集団的に所有される――ここにロシア人が焦土作戦を敢行しえた理由がある。

……〔19世紀末〕農民が没落傾向をたどったのには多くの原因があるが，共同体そのものも原因の一つである。集団的調整は，農民が新農法を学びとることをさまたげ農家を密着させるから，その原因となる。しかし農民は農村共同体〔commune〕が好きだったのだ。[7] 彼らが非難したのは共同体でなく政府と地主だった。政府は高い税金をとりたてたし，自家飯麦まで売ること

を余儀なくさせた。こうしてロシアの農産物輸出はまさに飢餓輸出であった。だから農民たちは大地主の領地にある土地に眼を向けた。農奴解放後も地主は土地の半分を持っていたので，農民たちはそれに眼を向けたのだ。彼らの論理は，神が土地と人間をつくり給うた，だから人間は耕やさなければならない，というにあった。土地を耕やさない者は土地の権利を持たない。つまり彼らは神学者なのであった。彼らから見れば地主は土地の権利を持たなかった。彼らは地主が法的権利を持っていることを知っていたが，地主が道徳的権利を持っていないと信じていた。彼らは農奴の時代にも地主に言っていた,「たしかにおいらはだんなのものだが，土地はおいらのものですだ」。

農民がもとめた万能薬は，土地を獲得し地主制を廃止し隣の地主領地にむらの持株をひろげる[8]ということだった。

四，五十年の間に農民の状態はますます悪くなっていった。飢餓が起り，それが農村の騒ぎを生んだ。農民は，地主の館に火をつけるなどして，赤い雄鶏を放した〔пустить красного петуха,「放火する」という意味のロシアの俗語をここで使っている〕。

1901年ないし2年までに，革命的諸党派は農民と連結することに成功した。諸党派は農村の騒ぎに連結した。農民は，1905—06年の革命運動に参加した。彼らの参加は無政府的ではあったが，彼らの気分は昂揚し，政府は失望した。政府はこれまで，農村共同体が農民を保守的にし革命思想に侵されないようにすることができるものと考えてきた。しかしいまや，そうはならなかったことがはっきりした。農村共同体は革命思想の伝導体〔conductor〕として機能しつつあった[9]。政府は，1906年末までに革命運動を制圧した時，農村共同体に対する態度を変えた。政府はそれに手を下し，個別土地所有者を育成した。ここに，1906年の農業改革，すなわち政府が熱心に農村共同体を破壊しようとした政策があった。旧制度の下では，農民は共同体メンバーの3分の2の賛成が得られなければ共同体を出てゆくことができなかった（1861年から1906年までの間のこと）。農民は都市に出稼ぎに行きたければ共同体からパスポートをもらわなければならなかった。農民は多くの点で地主に対した

と同じように共同体に対した。精力的で有能な農民は，共同体が最後まで出ていかせようとしなかった部類の農民であった。有能な農民は共同体を立ち去ることを許されなかった。しかし1906年の法律によって，政府は農民が単に申請書を出すだけで共同体から出てゆけるようにした。出てゆけるようになったが，どれだけの土地を分前としてあてがうべきかという新たな問題が生じた。共同体からの分離をうながすために，政府は分離者を優遇した。もし彼が自分の家族の規模に応じた面積以上の土地を保有していたならば，彼はそれをそのまま保有することを許された（ただし1861年の価格でその超過分の土地代金を支払うこととされた）。このように政府は分離者を優遇したのである。政府は農民をむらから広い土地に分散させた。というのは，むらが革命的宣伝のセンターだと政府が感じていたからである。[10] この政策がおおいに実行されたのは，1906年から14年までの間であった。二十分の一ないし十八分の一の農家が共同体から分離した。彼らの割当地は決して楽天地ではなかった。政府は彼らの味方をしたが，各農民がともかく自分自身の農場を持てるようにすることに政府が熱心であったのも，ここに理由の一つがある。分離した農民が土地からむらに帰る途中で不慮の出来事がおこったりもした〔むらに残った農民が分離農に良い感情を持たなかったことによる〕。そのうちに戦争が起り，政府の農村破壊作用は終った。

戦争中ロシアの農業は上ったり下ったりだった。「上った」のは物価で，「下った」のはロシアの軍隊が使う馬や人間が持って行かれたことだった。陸軍の崩壊は1915年に始まり，17年に革命が起った――政府が倒れ3カ月してソヴェトが権力をとった。

1917年にレーニンを首領とする新政権が行なった最初の一つは，全土地国有の宣言であった。これは理論にもとづくもので，いわば一つのジェスチャーであった。実際には農民は，地主の土地を勝手にして良いとされた。[11] 地主は出てゆくことを要求され，あるいはとどまる場合には農民として扱われた。農村共同体は自分の望みを100％実現した。全地主地が近くのむらの共同保有地に合併された。注目すべきはほとんど流血の惨事がなかったことだ。た

とえば，二つのむらの間に一つの地主領地があった場合も平和に合併がおこなわれた(アメリカでなら争いが起っただろう)。ロシアの農民たちは譲歩の仕方を知っていた。1917年と18年に地主地の合併はおこなわれ，農民は永い間の望み――地主的土地所有の廃絶――を実現した。各農家はその家族員の必要に応じて土地を耕やす――この思想は最高原則であった（若干の留保付きで)。政府はいくつかの模範農場を確保したが，それも後には消滅した。

これが，農民が白軍よりも赤軍，共産主義者に従った理由である。白軍は十分な政治的センスを持っていなかった。白軍は村人を絞り首にし地主領地をもとに戻そうとした。

だがしかし，農民は新政権に苦情をいった。彼らは新政権からの土地の贈物に幻滅した。反革命軍が土地配分を元に戻した時には，農民は新政権に対する不満を忘れたが（旧政権ならば彼らを旧制度に押し戻しただろうから)。

1920年に反革命軍が敗北した時，農民は新政権に対し穀物徴発などに反対して抗議行動を起した。まさに反乱であった。新政権は政策を変更した。諸君が知っている新経済政策（ネップ）が始まった。ネップとは何であったのか。新聞はそれは古い資本主義〔の復活〕だったと言っている。が私は，当時そうではなく農民への譲歩であると考えた。農民は彼らの穀物の一部を供出しその残りは自由にしてよいということになった。そこで1922年から29年までの７，８年ロシアの農民は比較的ゆたかであった〔well off〕。彼らは，自分たちの欲するあらゆる土地を持ち，自分で自由に経営することを許された。ロシアの農業は急速に復興した。それはロシアの人民にとって大きな救いであった。

諸君がラヂカルな変更を行なうなら，農業国を選ぶがよい。なぜならそこでは衝撃が吸収されるからである。工業制度の変革で失敗して都市の住民が食えなくなっても，農村が彼らを養なうことができるからである。

共産主義は進んだ〔advanced〕革命モデルである。革命の喜び〔luxury〕を享受しうるのは，一大農民階級を持ったおくれた〔backward〕国のみである。社会的組織〔social organization〕のための実験の地は，おくれた農業

国に求めよ。なぜなら，そのような国は衝撃に耐えうるからである。〔この四行ほどのパラドクシカルな表現は深刻な二様の意味をもつだろう。〕

1) Białystok は，Luxemburg, Rosa, *Die industrielle Entwicklung Polens. Inaugural-Dissertation zur Erlangung der staatswissenschaftlichen Doktorwürde der hohen staatswissenschaftlichen Fakultät der Universität Zürich*, Leipzig, 1898 : im *Gesammelte Werke*, Bd. 1/1, Berlin, 1970, S. 180（邦訳，肥前栄一訳〔未来社，1970年〕118ページ）によれば，19世紀後半羊毛工業地帯として栄え，「モスクワにとってはるかに危険な」(A. S., *Moskau und Łodź*, S. 32) 存在として知られていた。1862年にワルシャワ・グロドノ間に鉄道が通じて以来，羊毛製品の売れ行きが盛んとなり，S. パールマンの父は，そこで市民として活躍したらしい。しかし同時に労働者の集中地ともなり，1900年現在，労働者数12,955人（うち羊毛工業労働者8,787人，67.7%）を数えた（Antoniewicz, J. i Jok, J. (pod red.), *Studia i materiały do dziejów miasta Białegostoku*, Tom I, Białystok, 1968, str. 154)。19世紀最後の数年間には好況にも支えられてポーランド主要都市でと同じくこの地の労働運動は昂揚し，労働条件の改善も見られた。しかし1899—1902年の恐慌は労働者を激しく襲い，加うるにツァーリ・ロシアの帝国主義的軍備拡張による重税負担が農民・中小商工業者を苦しめていった。1903年，景気の小回復を機にこの地の労働運動はこの被抑圧力を攻勢力に転ずることができ，ワルシャワ，ウッジ（Łódź）とならんでビヤウィストクはポーランド労働者ストライキ運動の中心地の一つとなった。周知の民族的抑圧に加えてツァーリ政府の労働運動に対する弾圧は激しく行なわれた。ここでは19世紀末の賃金水準と労働日を回復しようとする経済要求のストライキが中心であったにもかかわらず，急速にそれが反ツァーリ・反資本主義体制的性格を帯びるに至ったのは，このためである，と今日の史学では言われている（*Ibid.*, str. 155—208)。ともあれS．パールマンは，この社会的雰囲気の中で多感な青少年初期の時代を生きた。Realgymnasium（実科高等学校と訳されるが私はこれが何年間でどんな性格のものかをまだ調べていない）で教育を受けたと彼の子息は言うし（Perlman, Mark, *Labor Union Theories in America : Background and Development*, Evanston, Illinois, 1958, p. 190)，1900年から1906年までビアウィストク商業学校で学んだと彼の友人は書いている（Taft, P., *Perlman, Selig* : in *International Encyclopedia of the Social Sciences*, Vol. 11, N. Y., 1968, p. 585)。そして1900年代初頭の数年，とくに1905—6年の間に革命を体験したことは彼自身が『講義』で述べている（「私は17才のときロシア第一次革命を見た。それは社会的地平における最大のものであった。それはドイツにはかり知れない影響を及ぼした。*Lectures*, p. 49)。このとき彼は，ユダヤ人の革命活動青年として，かな

りの迫害を受けたと思われる。ポグロムすなわちユダヤ人虐殺がとくにひどく荒れ狂ったのがこの町であった(Arnold, S. i Manteuffel, T.(pod red.), *Historia Polski*, Tom Ⅲ, Część Ⅱ (1900—1914), Warszawa, 1972, str. 452—3に掲示された写真を参照)。

パールマンは，三十数年後『講義』で「労働者は無条件に団結する」というドグマへの批判の文脈において，ユダヤ人とポーランド人との間の労働者同志の争いについて次のように述べている。「私は織物の町からやって来たが，そこにはポーランド人とユダヤ人の二つのグループがあった。ユダヤ人は産業革命前の手織工，職人であった。ロシアでは闘争の間中，プロレタリアートは一団となって行動した。しかし私は，ユダヤ人とポーランド人の市街戦を見た。ポーランド人は＜神様はポーランド人に工場の職を造ってくれユダヤ人に手仕事を造ってくれたのだ＞と言った。手仕事は工場のせいで衰退しつつあった。ナショナリズムが抬頭していった。ツァーリの警察がやってきてプロレタリアートの両派の間を調停した。これはショックであった。なぜならプロレタリアートが分裂し職のために相い闘っていたのだから。……こんなことは諸君のドグマチズムにショックを与えるだろう。もちろん，もっと簡単に考えることもできる，プロレタリアートが官憲のスパイにそそのかされたのだ，などと。……そう信ずるのはやさしいが，しかしそれは正しくない」(*Lectures*, p. 50)。ここには，彼の思想の一つの転換＝展開の根拠があわせて示されている。

2) 彼は，ビアウィストクを離れてナポリ大学に一年間以上学んだのち，1908年にアメリカに移住した。そして1909年にウィスコンシン大学に転学し，1910年に学士号を取得したのち，1915年に博士号を得たとされている（ウィスコンシン転学の年については Perlman, M., *op. cit.*, p. 190. それ以外については Taft, P., *op. cit.*, p. 585. 当時の学制が私にはよくわからないが，両者の記述に誤りがないとすれば，彼は異常に早く学士・博士号を取得したことになる)。

ナポリからアメリカに渡ったのは，ヨーロッパ旅行中のウォリング（W. E. Walling）のすすめによるとされている。シカゴでヴェブレンに学びマルクス主義に関する著述も書いた当時のウォリングは，初の労働者実態調査を精力的に行なっていたコモンズと親密であり，パールマンの才能を買ってコモンズの助手にと紹介したようである（伊藤文雄『コモンズ研究――産業民主主義への道――』同文舘，1975年，11—12ページ。なお，コモンズについては，邦語文献としては，同書および岩尾裕純「J・R・コモンズの経営思想――ニューディール期の序説――」≪季刊社会思想≫1—1（1971，5）120—149ページに，私は学んだ)。

コモンズは，「私の親愛なパールマン」「私のすばらしい同僚」と呼び，「私はビスノ〔Abram Bisno〕とパールマンから，マルクスとその後継者たち〔次ページ参照〕の理論と革命の洞察を得た」(Commons, J. R., *Myself*, N. Y., 1934,

p. 81) と述べている。コモンズと彼との親愛なる師弟関係については，学説内容からみた中西洋氏の簡潔な把握を紹介しておく。

中西氏はいう。俗に＜ウィスコンシン＞学派として知られるS・パールマンの理論は，とりわけドイツ歴史学派の方法に影響を受けた。この考え方の基本は，＜労働組合は歴史的な民主主義的プロセスの一つの重要な要素であり，その本質は，労働する人々の社会的地位，特に経済的自由を増進することを目指す社会的取引機構である＞というにある。

彼の師コモンズはアメリカ労働運動の歴史的事実に接近した結果として，＜労働組合は工業化と生産様式の技術的変化に先行していた＞こと，さらには＜労働組合の主目的の一つはチープ・レーバーの競争に対する防衛にあった＞こと――すなわち，階級の利益よりも個々の労働者グループの職の権利を防衛することにあったこと ――などの発見に依拠して，マルクス主義的理解を拒んだ。しかし，コモンズの労働組合理論としての整理の仕事は，その弟子パールマンの手にゆだねられた。彼は＜労働運動の理論は労働者の心理についての理論を含むべきだ＞と考え，人々が組合に加入する基礎には＜職についての稀少意識＞が存在すると主張した。そこから労働者は限られた雇用機会をグループとしてコントロールしようとするのであり，組合によって＜職の所有権＞あるいは＜職についての諸権利＞を確立しようとする。こうして，＜協約の時代，すなわち労働と資本との間における立憲主義＞が結果するのである。この系列の見解の方法的特徴は，組織された労働を，単に道徳的，政治的，経済的手段，あるいは反抗としてとらえるのではなくて，なによりもまず，それ自身を社会的一過程として―― 代表制民主主義の不可欠の一部分として，したがって第一義的にはその社会的役割において――把握する点にある，と。

次に，こんどの『講義』付録として公にされた彼の死直前の手紙を訳載して置こう。1958年4月19日ニューヨーク州，ニューヨーク市15番街東7，タミメント研究所における労働史研究者会議へ。私は，ロシアからやってきたばかりのとき，一国の労働運動は，あらゆる資本主義国にとって共通な要素によってのみでなく，またその国自身の特殊な文化的（理念的）発達によっても形成されたのだなどと，「知ったかぶり」を振廻していた（というのも私はマルクス，カウツキー，プレハーノフに夢中になっていたのだから）。だが約50年前のその頃わが有名な師，ジョン・R．コモンズ先生がためらいがちにおっしゃった忠言がある。私がここでいまそれを思いだすのは，おそらく不適当ではあるまい。それはこうである――今後，われわれは普遍妥当的解釈を許す問題がたちあらわれるなどと期待すべきではない，と。さらに先生はもう一点強調しておられた。曰く，諸君はできるだけ経験的事実の地平に密着して得られる諸君の解釈に固執せよ，ただしもっとも包括的な解釈を探究することを決してやめるな，と（*Lectures*, p. 169)。

3）息子マーク・パールマンやタフトの前掲書における評価は当然好意的であるが，ここではアメリカ経済学説史上で比較的大きな地位を彼に与えているベン・B・セリグマンの記述をも公平のために引用しよう。

「時折コモンズは，生きのいいラヂカリストを ―彼が政治屋として振舞うようなら別だが― 教室に連れてくることがあった。ただしコモンズはマルクス主義的信念に対する強力な反対者だった。彼のもっとも優れた協力者たち，エイブラハム・ビスノ〔Abraham Bisno〕とセリッグ・パールマンは，ツァーリの抑圧から逃れたユダヤ人だった。二人とも或る種のマルクス主義者として出発したが，しかしコモンズとアメリカの環境の影響で考え方を変えていった。……ヨーロッパでは社会民主党系の確信に満ちたマルクス主義者だったパールマンは，20才の時にロシアからアメリカに渡った。1909年，彼は教育を終えるためウィスコンシンに行き，そこでフレデリック・ジャクスン・ターナー〔Frederick Jackson Turner〕とコモンズに認められた。コモンズの労働史研究プロジェクトに参加した彼は，移民労働者の労働組合運動の起源を研究する仕事を与えられた。やがて彼のいだいていた若いマルクス主義は，コモンズ的な資本主義の市場理論にとってかわられた。

コモンズは労働組合主義者の小企業者志向とか金儲け志向といったバイアスを強調したが，パールマンは＜日々の糧＞労働組合主義を発見した非社会主義者〔ex-socialist〕の役割の鋭い分析を以ってこれを補足した。ゴンパーズやストラッサーのような非社会主義者が新しい労働組合主義を基礎づけ，アメリカ土着の至福千年追求の思想にこれを置きかえたのだ，とパールマンはいう。これは，階級意識よりも職人的団結心と職業意識に訴えることによってなされた。それは資本主義と衝突しないような労働組合主義であって，果実のよりよい分け前を欲するだけだった。これを達成する手段が団体交渉による協約，すなわち，組合と雇主との間の関係を調整する装置であった。もちろん交渉は或る種の平等を前提とするが，当時そのような状況にはなかった。法人資本主義〔corporate capitalism〕は着々成長しつつあったが，労働組合はやっと緒についたばかりだった。そのうえ，集団協約や経済条件を強調するのは，労働組合の戦術上政治行動の意義を二次的なものにおとしめることだとされた。……労働組合は，職の所有権〔property rights in the job〕の概念を発展させなければならなかった。なぜなら限られた就業機会のもとでは，職の権利を確立し団体交渉による協約を通じて職の条件を規制する必要があったからである。パールマンは，これは新しいアプロウチだという。それは革命目標から離れ，プラグマティックなアメリカの環境に労働組合が適応することを意味した。……しかしパールマンは，このような態度が或る種の自己満足に導びくかも知れないと認めた。続く事件がすべてをあまりにも雄弁に語らねばならなかった。つまり，大量生産の工業の労働者が組織化を追求した

1930年代のような危機の時代に，公的な労働運動の指導者は，それにチャレンジすることができなかったのである。……知識人の抽象的理想主義は，それが先験的な観念と一緒になったとき，労働者の必要にこたえることに失敗した，とパールマンはいう。これはコモンズの考えでもあったから，パールマンはたしかに良い弟子だった。アメリカの労働組合の基礎をなす思想のハンドブックとして，『労働運動の理論』はきわだっている。それは，おそらく，アメリカの労働組合がアメリカ社会の欲するものであるということを他のいかなる労作よりもよりよく熟考しているのである。」(Seligman, B. B., *Main Currents in Modern Economics : Economic Thought since 1870*, N. Y., 1962, pp. 162, 241—3)

しかしわが国では従来，ウィスコンシンでS．パールマンに直接教えを受けた松井七郎氏（米国労働運動史に関する著書多数のほかに『労働運動の理論』〔法政大学出版局，1954年〕を邦訳公刊）以外にはあまり直接紹介した人がいなかった。

たとえば森杲『アメリカ資本主義史論』(ミネルヴァ書房，1976年）は，広範かつ簡潔なアメリカ当該期移民＝労働問題研究の一章（第4章）を含んでいるが，氏は博引にもかかわらずパールマンにふれていない。けれどもしかし，彼の労働運動史家としての業績は氏のすぐれた分析の批判に耐えないものではない。

ところで最近わが国では，隅谷三喜男氏と萩原進氏とが彼の労働組合論について紹介＝批判を行なっている。隅谷氏の論稿「労働組合運動の一般理論のために」(1)，（2・完），《〔東大〕経済学論集》，第40巻第2，3号（1974年7，10月）は，氏の最近著『労働経済の理論』(東大出版会，1976年）に収録されている。また萩原氏のは，「コモンズ＝パールマン理論に関する覚書」≪経済志林≫，第43巻第1号（1975年3月）である。

隅谷氏は，「労働組合論の古典である Selig Perlman, *A Theory of Labor Movement*, 1928. が飜訳されたのは，昭和29年(松井七郎訳『労働運動の理論』)であったが，労働問題研究者にはほとんど影響を与えなかった」（上掲論文((1))、5ページ)ことを遺憾とし，「パールマン説こそが現代の労働組合論として，もっとも有力な理論だから」(同上，10ページ）積極的にこれを検討すべきだと考えて，自己の「一般理論を構成するため」(上掲論文((2・完)), 73ページ）のワン・ステップとしてこれを詳細に紹介＝批判しておられる。氏のパールマンに対する評価は，一言でいえば「労働問題の中心が労働者にあることを考慮して，そのビヘービヤーやそれを支配する価値理念を中心に分析〔し〕……運動の主体としての労働者の側からアプローチしたパールマン理論の，理論史上の意義は確認」(同上，71ページ）しつつ，「パールマンが労働力の側面〔資本制社会において〈商品化せしめられざるをえぬ労働力〉という経済学的範疇で把握しなければならないその

側面――日南田〕を無視し，そのようなアプローチをインテリの抽象論として非難したことに」は「同意できない」（同ページ），という点にある。そして，「現時点に立って組合の理論を構築するためには，パールマンの指摘するように，一つの理念からアプローチするのでなく，組合運動の現実に立脚することは当然として，生産物市場や労働市場の分析とならんで，否，その出発点として，生産過程における労働者の存在の構造とそこを支配するルールを究明し，それが労働者の組織やその活動を規定する論理を明らかにす」（同上，73ページ）べきことを今後の課題としている。萩原氏の論究もかなり水準の高いものであり，両者によって，まことに適確な評価と実りありうる批判とをははじめてえたというべきであろう。

なお，大河内一男氏はその『社会政策四十年――追憶と意見――』（東大出版会，1970年）において，次のように記している。1954年の初夏，マディソンで「当時はまだパールマン老先生が健在で，いろいろとアメリカの制度や労働組合研究の手法について先生の話を拝聴することができ……パールマン先生の奥さんはロシア人だそうで，パールマンさん自身もポーランドかどこかの生まれで，生粋のアメリカ人でないために，いろいろ苦労があるという話をききました。……私はコーネルのパールマン二世〔前掲の Mark Perlman，現ピッツバーグ大学〕に，お前はだれの理論がいちばん優れていると思うか，とききましたら，もちろん親父の理論がいちばん正しいと思っている，と言下に答えたのには〔※〕，ぼくはやや驚きもし，感心もしたのです」（同書，371ページ）。

〔※〕これは，Perlman, M., *Labor Union Theories in America : Background and Development*, N. Y., 1958. をまとめつつある30才に年満ちた意気軒昂たるマークである。この書は，あたかも，いかに父の理論がすぐれているかを論証しようと志したごとくである。これに対する書評はわが国では，中西洋氏（《日本労働協会雑誌》No. 14.〔1960年5月〕）。前掲の中西氏によるS．パールマン理論の紹介は，同誌66ページの部分を私がまとめたもの。

4) Taft, *op. cit.* p. 586. なおタフトは数年前ブラウン大学教授職をリタイアしたが健在。

5) 私にとっては，このような彼のいわゆる "Cap-Soc"（歴史的＝理論批判的な「比較社会経済体制論」というべきか）およびその不可欠の構成部分を成す彼の「ロシア革命・農民運動論」をどのように批判的に摂取するかが，今後の一課題である。

講義内容のうち注目されるのは，帝国主義論，ファシズム論，知識人論，ナロードニキ論，等であるが，ここでは紹介しえない。マルクスないしマルクス経済学に対する理解も当時の水準を越えている，と私には思われる。論証は他日を期したい。ただ一つ次の発言を引用しておこう。「われわれは，マルクスのリアリズ

ムの方法を堅持し続け〔to continue Marx's method of realism〕，行動する〔社会〕群，歴史を造る群に刮目しなければならない。」これがまさに第五部（マルクス批判）中の一句である（*Lectures*, p. 52）。

なお，講義の背景すなわち比較体制論としてこれを理解するには，1920年における次のようなきわめて興味ある彼の文章を読む必要がある。

……神の義によって統治するという権利がついに歴史の片隅にいっさい追放されてしまった現代では，民主主義は何よりもまず対立する社会諸グループの間を効果的に平和的に調整する手段として大切に育てられるのである。われわれは，民主主義を，社会的激変と流血の闘争に対する保険とみなす。……社会科学を学ぶ者にとっては，次のことは自明である。すなわち，ほとんど全世界を相手にして二年以上にわたって，ロシアで維持されているプロレタリアートによる統治は，単なる偶発事として片附けることはできない。それは過去および現在のロシア人の生活の産物とみなされなければならない。……

マルクス的社会計画を実演すると称するこの革命が，マルクスの唯物史観の誤りを示し，歴史が経済的な力および非経済的な力の両者によって創られてゆくという事を明示しているのは，運命の皮肉である。周知のように，マルクスは次のように教えている。――歴史は階級闘争であって，地主貴族，ブルジョアジー，プロレタリアートがつぎつぎに社会的生産技術の進歩と共にそれを最大限効率的に運用し得る階級として勃興する。そして，その中の一つの経済的階級が支配的地位につくと，その階級は支配階級としてのあらゆる心理的属性，すなわち不屈の権力意志（権力に伴なう役得に対する卑しい欲望は言わずもがな）を完全に持つに至る，という事がわかる，と。明らかにマルクスは，経済的進化と共に統治につくべき階級において有力な権力意志への志向が相応して不可避的に発展する，ということを認めている。しかし，西洋諸国ではそのようなことがあるにしても，ロシアでは支配階級，すなわち貴族とブルジョアジーは，明らかに危機に面してその心理的なテストに失敗したのである。彼らがボリシェヴィキーのクーデター後に実際戦わずして降服したざまを見れば，この失敗はまったく歴然としている。

ロシアの支配階級のこの明らかなひよわさおよび気力の欠如の秘密をつかむには，ロシア史の特殊性，すなわちロシアの発展の・組織された政府による完全な支配の歴史の・特殊性を研究しなければならない。……

政治への無関心〔apolitism〕は，ロシア史をつらぬく赤い糸である。……

……しかし，ロシア資本主義は，自らの足で立つことができるようになってからさえも，自分自身の努力よりむしろ政府の助成に依存するくせを止めなかった。専制政府の側でも産業側に勝手にさせておくのを嫌がった。政府は，寛大にも資本家にたいし関税保護と有利な国庫発注による助成金とを与えたが，そのかわり産業を自己の支配下に置いた。……ブルジョアジー，特に高級ブルジョアジーは，

よくいっても産業延臣〔industrial courtiers〕の階級になることができるだけだった。そして貴族がついに没落した時この延臣たちは，革命の混乱のさなかにも自己の階級の権利の頑強なチャンピオンに一夜にして変ずることなどはできなかった。たしかに，ロシアのマルクス主義者たちが予言したように，ロシアは資本主義段階に入ったのだが，それにもかかわらずそのブルジョアジーは支配階級たるべき不屈の権力意志を欠いていたのである。

ブルジョアジーが私的所有のための闘争において弱かったというのは，ある意味では，彼らが社会の他の階級の中に同盟者を持っていなかったということで説明できるだろう。ロシアの農民は，共同体的土地所有の雰囲気の中で育ったので，私的所有の熱狂的支持者たるには程遠かったのである。……

ブルジョアジーが革命の入口におずおずしながら到達したちょうどその時，権力意志を発達させつつあった賃労働者階級は，あらゆる期待以上に進撃し，マルクス主義者のタイム・スケジュールを打ち砕いた。こうなった一番重要な原因の一つは，産業労働者階級の統一，すなわち給料のよい熟練労働者群と低賃金不熟練階層との間の，換言すれば高級組織労働者と末組織の奴隷的階層との間のゆるぎない統一である。旧体制下の経済的・社会的抑圧が，労働者のいかなるグループをも体制側に賭けるつもりにさせたり仲間から別れて良い子になろうとさせたりはしなかった。さらに，数十年にわたって，そして特に1905年革命の記念すべき日日以来，労働者階級は社会主義的宣伝煽動家たちからプロレタリアートの偉大な歴史的役割の思想を吹き込まれてきたのである。……

……危険を感じた少数〔旧〕支配者は権力を維持するために不可避的にテロに頼るだろう。だから，1918年にボリシェヴィキーが流血の方法をとったからといって驚くことはない。われわれは，アメリカがロシアの経験したようなことをしなくてもすむだろうと確信する。だがそれは，われわれが，アメリカ人はロシアの反革命に対する闘争委員会がなしたと同じことを仕出かさないだろうと確信しているからではない。そうではなくむしろ，ロシア，すなわちブルジョアジーが闘志を持たず，農耕者がなかばコミューン主義者であって，土地の贈物であるがゆえに自分たちの当然の分前を政府に出さないで済まそうとするような国，そして産業プロレタリアートが闘争を恐れず準備する唯一の階級であるような国，このようなロシアの対極にアメリカが立つ，とわれわれが考えているからである。ボリシェヴィズムはアメリカでは考えられない。なぜならば，ある想像できない事件によって政府が打倒され労働者独裁が宣言された場合でさえ，それは決して＜そのまま維持される＞ことはできないだろう。アメリカの企業者階級を知る者は，彼らが少数者によって樹立された革命にどんな情況であっても屈服するなどとは，夢想だにしないだろう。アメリカのボリシェヴィキー・クーデターは，苦い結末，すなわちおびただしい農業者階級が私有財産制度の防衛のためにブルジョアジー

と同盟するような一つの戦争，そのような市民戦争の結末を意味するだろう。とはいえ，アメリカの賃労働者階級のうちの少数者こそが世界でいちばん社会主義的階級意識に目覚めている，といっても過言ではないのであるが。典型的なアメリカの労働組合主義者は，なんら窮極的な社会的目標を持たない。かれは，石炭業・建設業のような集団交渉のおこなわれる産業ですでに支配的となっている部分的な統制を，あらゆる産業労働者のために獲得せんとすることで満足する。平均的なアメリカの勤労者が理想とする社会秩序は，組織された労働と組織された資本とが同じ交渉力を持つというような社会秩序なのである。……

（*Lectures*, pp. 166—8所収，≪アメリカ社会学協会報≫第14巻〔1920年〕『民主主義の問題』中の彼の論文よりの抜すい）

ダニエル・ベルが，パールマンはゾンバルトの「なぜアメリカ合衆国では社会主義が存在しないか」の三つの論旨を拡大したというのは，鋭い分析ではあるが（Bell, D., *The End of Ideology*, Revised ed., N. Y., 1962, p. 276—7），しかしパールマンがつねにアメリカをロシア革命との対比において考え続けたという点を忘れてはならない。

6）20世紀初頭三つのロシア革命・農民運動についての論という本稿の主題にかかわる研究状況をやや詳しく概観しよう。

カナダのトロント大学教授J．メイヴァーは，Mavor, J., *An Economic History of Russia*, Vol. 1, 2, L., 1914（2 nd ed. rev. and enlareged, N. Y., 1925；reissued,N.Y., 1965）で，ロシアの1905年革命時の共同体拠点農民の反資本主義・反ツァリーズム・反地主的土地所有の運動をかなり詳細に叙述していたし，イギリスの高名な故ペアズ教授の弟子L．A．オウエンは，Owen, L. A., *The Russian Peasant Movement : 1906—1917*, L., 1937（reissued, N. Y., 1963）はもっと明確に1917年革命期農民運動についてこの主題を取扱っていた。アメリカでは，最初の革命前ロシア農民・農業史を書いた G.T. ロビンスン（Robinson, G. T., *Rural Russia under the Old Régime*, N. Y., 1932〔2-nd ed., N. Y., 1957）に直接・間接に学んだ俊秀たち，たとえばD. W. Treadgold, W. S. Vucinich, F. M. Watters らのここ20年来の活躍が目立ってはいる。Maynard, J., *The Russian Peasant : And Other Studies*, Book 1, 2, L., 1942 や E. H. Carr に直接・間接に学ぶ・あるいは自力で開拓しつつある・M. Lewin や T. Shanin, R. E. F. Smith らイギリスの俊英も忘れてはなるまい。パリの Basile Kerblay 教授はかの Чаянов の全集を編さんして大変な貢献を行なったが同時に，革命前後のロシア農村・農民共同体の「文化」としての連続性にも注目する諸論文を書き続けている（最近の好論文 "Le village en U. R. S. S. : changements et permanences", *Sociologia Ruralis*, Vol. XVI, no. 4, 1976, pp. 258—278）。多方面のソ連研究が盛んな西ドイツでは D. Geyer 教授の指導する Tübingen 大

学の若手研究者にこの主題では有為な人が居る。古典的には，M. Weber およびその正反対の R. Luxemburg，この二者の「ロシア革命論」を忘れてはならない。

しかしながら，政治家は別として，1905年革命の自己の体験を発条としつつその素材を学問的論述に高めて当の主題に迫りえた人は，おそらく，S．パールマンのほかにそう多くはないのである。

もちろん，現地ソ連邦の革命参加者→学者の中には，稀に居る。故シヴコフ教授である（Сивков, К В., Крестьянские приговоры 1905 г., ≪Русская мысль≫, кн. Ⅳ, отд. Ⅱ, 1907)。あるいは故タン＝ボゴラス教授である（Тан-Богораз, В. Г. (ред.), Революция в деревне ; очерки, Ч. 1, 2, М.-Л., 1924—5)。しかし，周知のように，ソ連の歴史学界の教条主義的体質はスターリン批判以後も容易に改まってはいず，これらの貴重な研究はほとんど無視されている。故 Дубровский 教授も振幅の大きい人であらざるをえなかった。ナロードニキ的見解を肯定することに通ずるような研究論文は概して陽の目を見ないのである。М. Я. Гефтер や К. Н. Тарновский，また А. М. Анфимов は今日，研究活動をいちじるしく制約される結果となっている。

このような世界の学界状況の中でパールマンの体験的論述は貴重である。

わが国の研究者の研究については，拙著『ロシア農政史研究――雇役制的農業構造の論理と実証――』御茶の水書房，1966年と若干の論文および和田春樹『マルクス・エンゲルスと革命ロシア』勁草書房，1975年と若干の論文の二つをあげるにとどめる。もちろん，渓内謙，田中陽兒，保田孝一，長尾久，菊池黒光の各氏を軽視するわけではない。しかしここでは，マルクスのザスーリチあての手紙とその4つの草稿（1881年3月）の論理，ナロードニキの理論と運動，革命期共同体農民の運動の三者の関連に留意するからである。

なお，社会学，文化人類学，政治学からのアプロウチで主題に迫るもの各一つを挙げれば，Dunn, S. P. and E., *The Peasants of Central Russia*, N. Y., 1967 ; Wolf, E. R., *Peasants*, Englewood Cliffs, 1966（邦訳，佐藤信行・黒田悦子訳，鹿島研究所出版会，1972年）；Moore, B., Jr., *Social Origins of Dictatorship and Democracy*, Boston, 1966. であろう。

そして，社会思想史的アプロウチによるナロードニキ研究を通じてここでの主題に迫るものは，ポーランドのA．ヴァリツキ教授である。Walicki, A., *The Controversy over Capitalism : Studies in the Social Philosophy of the Russian Populists*, L., 1969（邦訳，日南田・松井憲明・高橋馨・富岡庄一訳『ロシア資本主義論争――ナロードニキ社会思想史研究――』ミネルヴァ書房，1975年)。

本文最後の文言に関連しては，Walicki 著書自身および彼や Kerblay 教授の師，Witold Kula 教授の *Teoria ekonomiczna ustroju feudalnego*, Warszawa, 1962（英訳は Kula, W., *An Economic Theory of the Feudal System :*

Towards a Model of the Polish Economy 1500—1800, L., 1976). そしてかの Karl Polanyi 教授の高弟 George Dalton 教授の *Economic Systems and Society : Capitalism, Communism and the Third World*, Harmondsworth, 1974. を挙げなければならない。とくにKula教授は，真の「比較社会経済体制論」たらんとする自己の経済学の論理を貫徹しつつ，「あらゆる契機(モメント)において農民が自己の状態の悪化におびやかされていたようなこの情況では，農民の伝統主義(トラディショナリズム)は，たとえそのことがパラドクシカルに見えようとも，階級闘争の一形態なのである」（英訳版，70ページ）と説いて，鋭い。

7)—11)　これら各論点の認識は，今日の私たちの認識とほとんど等しい。たとえば Hinada, S., "The Russian Peasant Movement in the Era of Imperialism : A Socio-Economic Sketch" *Hokudai Economic Papers*, Vol. 3 (1972—3), pp. 1—10.

（この小論は，昭和51年度文部省科学研究費補助金「ソ連・東欧の農民問題の総合的研究」による成果の一部である。規程により記す。）

追記　(1)　本稿は，鎌田正三教授の御退官を記念しようと志して，アメリカ研究に縁のない私が私の専門のロシア研究との接点を求めてさぐりあてたパールマンに関する論稿の序であるが，私の能力と紙面の都合上<文献紹介>にとどめざるをえず，失礼した。

(2)　Selig の子息 Mark Perlman 教授は現在 *The Journal of Economic Literature* の編集責任者である。このすぐれた雑誌の存在意義を石垣博美教授に教えられた。

(3)　大爺栄一教授は1951年の頃ウィスコンシンの農学部に留学されマッカーシイズムに挫けず "Cap-Soc" を講ずるS．パールマンのことを見聞されたという。

(4)　猪俣津南雄が1915年から18年までウィスコンシンの大学院に学び，若きパールマンからも教えを受け，コモンズのセミナーの同級生（ユダヤ系ポーランド生まれ）と結婚するに至るという事実は，長岡新吉教授に教えられた雑誌≪猪俣津南雄研究≫第12，13，14号（1972年）所載の藤田悟「猪俣米国留学考」で知りえた。ヴェブレンと猪俣との「交流」については，津村喬「猪俣津南雄序説——日本革命運動におけるコミンテルン体験とアメリカ体験——」≪中央公論・歴史と人物≫1972年8月号，100—122ページ，なるすぐれた論稿があるが，同じ制度学派とされながら異る「体験的ロシア革命・農民運動論」をもつパールマンと猪俣との交流は，どのていどのものであったか，またその質はどうか，を今後明らかにできれば，と思う。猪俣津南雄『窮乏の農村』（改造社，1934年），同『農村問題入門』（中央公論社，1937年）のはじめと結論部に置かれた・隠された（と私は見ている）・「ヴェラ・ザスーリチの手紙へのマルクスの回答とその草稿」引用に托した帝国主義期の農民共同体の特殊なあり方にかかわる彼の認識は，はたして，猪俣の現状分析と文献研究のみによるものだろうか。